

《体 操 部》

能代高校体操部、その名を全国に轟かせたことは、今この文で紹介することも無いと思います。やはり一度燃え上った炎は消えるものなのでしょうか。全国優勝をすることが、こんなにまでも苦悩と困難の連続なのでしょう。私は、母校である能代高校に来て、まだ二年目です。四三年に卒業しましたが、四〇年に入学した時はまだ全国に名前を轟かせていたころでした。以前は太田口先生の指導のもとに数多くの名選手を生み、ここに「体操能代」、の名前が大きくクローズ・アップされ、その後中村史郎先生のもと、太田口先生が築き上げた基盤から、体操能代は不動のものとなって行ったのです。

四〇年ころにおいても三田先生の指導のもと、クラブの雰囲気は、ただただ全国優勝というものに突き進む雰囲気だ一分、一秒たりとも気をぬけない状態でした。全県東北等は眼中になく、そのころのライバル校である中京高校、清風学園、国学院高校というものがあるのみでした。負けること

の意味も知らず、ただ勝つことだけに精神集中をしていたようでした。三田先生について行けば、という気持が全員にあり、苦しいながらも、希望に満ちた練習の日々でした。しかし私たちが四二年に全国二位の成績で、それからしばらく全国に名をつらねたことはありませんでした。私たちの年代、四二年を境として、ここに転換期とむかえたわけです。四六年に全国七位とな

インターハイ優勝を目指して

能代の体操と云えば、戦前の明治神宮体育大会で、全国優勝をしており、その歴史的重みは、大変なものでした。

旧制中学へ入学してから初めて、その伝統の偉大さを知り、守らなければならぬ使命感を強く感じながらの、練習の日々でした。高校野球の熱戦も、若人の血と涙のぶっつけ合いを感ぜさせ、人々を感激のるつぼと化し、素晴らしい感動を与えますが、体操競技の躍動も、高校

りましたが、その後が続かず、今までにいたっておりません。

ここ数年は部員数も少なく、ひどい時には、一年から三年までで三人という時もありました。体操部の弱体化の理由はいろいろとあげられ、それをいろいろ検討してみました。やはりその中の一番大きな原因は、部員不足と、中学から高校に来て、新しい種目が三種も入るといことだと思

小野 喬

時代の我々に与えたやる気づくりは、野球にも匹敵する魂をつくりあげてくれたと思っております。人間は、心身の鍛練をやる気でやっただとやる気のなかつた人との差が、中年を過ぎてから表われてくると、よく云われます。進学率も、スポーツの盛んな時期と、そうでない時期との良し悪しが、意外と影響し、スポーツの成績の良かった年に、進学率が良いと云う傾向も全国的資料から見ても言え

います。以前においては中学校で他のスポーツをやり、高校に来て、初めて体操をやりすばらしい成績をおさめた先輩も数多くおられます。しかし今は、体操そのものが変化し、三年間で六種目中、新しい三種目をマスターするには困難になってきました。全国においては、能代高校を破るため、中学校から力を入れはじめ、中学校においてその新しい三種目を高校生といっしょにやり初めたのです。

しかし、能代においては、高校に入ればなんとかなるといふ気持があったようです。新しい三種目をやり始めたのは、つい最近なのです。数年前は、中学校の体操部に、指導者さえいない年がありました。バスケットとか、バレーにおいては、新入生が高校生の中で、へたにしろ、いっしょにプレーができます。また、まぐれでシュートが入ったり、スパイクが決まったりすることもあります。しかし体操の場合、六種目であって、三種目ができてもしようがないのです。新しい種目において、新入生がまぐれにしても、規定が通ったり、鞍馬のサークル一回さえも、まわることはないのです。その新しい種目を高校に入ってからやる人と、中学時代にやってきた者との間には、入学時において、もう相当の差ができて

るようです。私達の時代は、スポーツも頑張り、進学率も良かったと思います。これも、高校時代という若い力を全国的に、スポーツに勉強に精進したことによるものだと確信しております。

高校時代は、私自身は、体操のみに日々を費やしたと云われても仕方ない位、練習に励んだことは事実です。手の皮が、一枚むけようが、足に軽い捻挫をしようが、練習に練習を重ねました。三百六十五日、一日も休むことなく、コツコツと練習を続けました。目標は、只一つ、全国制覇でありました。血小便の出ることも、幾度かありました。

しかし、歯を噛いしばって、休まない練習を継続しました。

全県大会で優勝し、全国大会に出場できたときは、先輩の伝統を継ぐことのできた喜びに感涙したものです。

若いときは、二度とありません。すべてのエネルギーを投入して、頑張る根性こそ、尊い

試験であると思います。幾多の苦難を体験して、初めて、経験できた全国制覇は今でもなお、青年時代の貴重な宝物を獲得したものだとか大変感慨無量に思っております。

我が能代高校、創立五十周年記念を心から祝すと共に、誰にも負けない頑張り、の精神を身につけ、自分自身の素晴らしい人生街道を歩むことを若い後輩には期待したいと思います。

将来の築城は、たゞ実践あるのみであるということを進言し、記念の執筆をしたいと思います。



(ローマ五輪で、表彰台上の小野喬氏)

いるのです。その為、どうしても、中学校の強化が必要になってくるのです。今では中学校に、すばらしい指導者がおられ、着々と、中学校と高校の連携ができつつあります。この問題をなんとか解決すれば、もう一度、能代高校の名を全国に轟かせることも、そう遠くはないと思っています。

今年も、有望な新人が五人も入部し、部員もやっと、八人となりました。やはり生徒において、三年も苦しみ、悩み、やりたいたいこともやらずに、ただ体操ひとつに身を投げだしているその結果を、三年の全国大会において花を咲かせてやりたいと思っています。以前のような、体操能代とまでは、まだまだ時間がかかると思いますが、しかし、全国に目を向け、それに突き進むその気持だけはいつも生徒といっしょに心の中にはぐくみ、がんばっていきたいと思っています。

- 昭和12年 明治神宮大育大会に於て優勝
- 17年 明治神宮国民練成体育大会に於て個人優勝(中村史郎)
- 21年 第1回国民体育大会に於て優勝 個人優勝(鍋谷鉄巳)
- 22年 第2回国民体育大会に於て優勝 個人優勝(小野喬)

- 昭和23年 第4回国民体育大会に於て優勝 第1回全日本高等学校選手権大会優勝 個人優勝(小野喬)
- 25年 第2回全日本高等学校選手権大会優勝
- 26年 第3回全日本高等学校選手権大会優勝
- 27年 第4回全日本高等学校選手権大会優勝 個人優勝(鈴木恪悦)
- 27年 第7回国民体育大会に優勝
- 30年 第7回全日本高等学校選手権大会優勝
- 31年 第8回全日本高等学校選手権大会優勝 個人優勝(平川文雄)
- 31年 第11回国民体育大会優勝
- 31年 第9回全日本高等学校選手権大会優勝 個人優勝(辻健一)
- 32年 第12回国民体育大会優勝
- 32年 第10回全日本高等学校選手権大会優勝 個人優勝(建部盛蔵)
- 34年 第11回全日本高等学校選手権大会優勝
- 35年 第12回全日本高等学校選手権大会優勝
- 36年 第13回全日本高等学校選手権大会優勝 個人優勝(小野喬夫)
- 36年 第16回 国民体育大会優勝

昭和38年 第15回全日本高等学校選手権大会優勝

《籠球部》

能代高校籠球部の創設は昭和十年頃のことであるが、部活動として対外試合に参加し、活躍するようになったのは昭和十三年のことである。つまり、勝永(旧姓奥田)徳三郎、阿部実、谷田部徳郎、大谷甲二、武田圭吾ら旧制13期の有志によって態勢が整えられたもので、彼らは、昭和十六年全県準優勝を果している。また、昭和二十二年、金沢市で行なわれた第二回国民体育大会には秋田県代表として出場し、三回戦に進出した。その時のメンバーは、当時、バスケットセンス、技術共全県一の折紙をつけられていた畠山淳一(旧19)、笠井新一(旧19)、大塚悦松(旧19)、平山恭三郎(新2)、藤田吉雄(新2)、浅村清(新2)、大越忠(新2)らである。昭和二十六年二十八日は、工藤隆(新5)、佐々木(旧姓保坂)正紀(新5)の活躍により、

県北大会では常勝でなり、当時、実業用全県一であった小坂鉦山チームと対戦しても遜色のない戦いぶりを示した。昭和二十七年には「能代南高バスケットボール後援会（自称松陵会）」が結成され、本校バスケット選手の間意会的存中となつて、現在に至っている。昭和三十三年には、全県二位となり、東北大会に出場している。

しかし、創立当初から現在まで、バスケットに精通している顧問に恵まれず、また、市内において能代工業高校が活躍するようになってからは、県北地区は言うに及ばず、全県でもかなりの強さを誇っていた本校籠球部も昭和三十三年頃から下降線をたどり始めた。時々、かなりの技術をもった選手が入部し、ワンマンチームとして活躍しつつも、全県三回戦進出がやっとであった。昭和四十八年、センター清水文彦、谷田部二郎、フォワード小山勉、ガードに長谷川清純等、中学時代に全県大会、東北大会で活躍した有名選手が入部し、十数年前の栄光に近い働きを見た。県北大会では能代工業以外、敵なしとなり、昭和五十年にはくじ運の不運もあって三回戦どまりであったが、高校総体、総合バスケット選手権等においても、能代工業高、秋田いすずチーム以外、敗け知らずであった。

さて、バスケット部はじまって以来の大量入部（八月現在十七名）した一年生と共に、琴丘中、能代一中出身者の有望な二年生は、今日も練習に余念がない。六月に誕生したばかりの新チームは、八月の県民体育大会で、三年生中心の秋田高校に敗れたものの、見事、ベスト・エイトに輝く活躍を、もはや見せている。

バレー部

昭和四年亀井茂市先生の指導のもとに、一期谷内勝美、小山幹朗等によって課外運動の一環として始められたバレー部も、昭和五年二期谷内義郎主将の時、全県大会に初出場、能代高校バレー部の輝かしい伝統の第一歩を踏み出した。三期佐藤市三郎主将に続いて昭和七年（四期）平川正司主将の時、金県大会に初優勝、続いて昭和九年（六期）吉武栄司主将のもと、第二回の優勝をかざり、能中バレー部の基礎固めに大きな力となった。その礎石となったものは二代目部長の中林豊市先生が母校の広島高

師から三年連続してコーチを招聘、広島バレーの真髄を能代の地に植え付けたことであり、能代のバレーを全国的に開花させた大きな要因と云えよう。

その後、昭和十年頃から戦時中にかけて六期佐藤実、七期塚本信男、十期大原義正等の先輩による母校チームに対する献身的な指導は能中バレー部の基礎造りに大きな貢献があった。その後、相場鉄蔵先生のスパルタ教育のもとに黄金時代が続き、明大主将全日本代表となった山本厚以下幾多の俊英を世に送り戦後に続く。

戦後、早大出身の武田重蔵教諭が監督に就任、戦前戦中の先輩の築いた伝統の上に更に全国的に大きく飛躍した。それまで県内で圧倒的な優位を誇っていた能代高校に戦後抬頭してきた大館鳳鳴高校と能代工業高校が、三者共に県の覇者となるべくデッドヒートを演じ、中央の技術導入に努力し全国レベル目指して死力を尽した結果、能代高校が三十一年に遂に鈴木、菅原等を擁してインターハイ優勝の金字塔を打ち立てる偉業を成しとげた。その中心となった菅原が後に東京オリンピックで大活躍をしたのは、我れ我れの大きな誇りである。

近来、大学受験が苛烈な様相を示すに従って受験校である能代高校の運動部も大き

体操部と共に全国優勝!!

武 田 重 蔵

戦後の食糧難時代も一応おちついた昭和二十六年四月、幾多の先輩が築いた伝統ある母校のバレーボール部の監督を務めることになりました。名門体操部が数多くの全国優勝、小野・鍋谷両選手のオリンピック出場と華々しい活躍をまのあたりにみて、私の指導するバレー部も体操部なみにしたい、選手に勝者の感激を味あわせたいというのが、念願でした。

四年間ガムシヤラな練習をしましたが今一步で優勝することが出来ず、何か新しいトレーニングはないものか？練習の前後にやる体操をバレーに役立つ体操にしたい、機敏性を養う体操は？そこで体



東京オリンピック選手村で、
小野・菅原両選手と共に

操部指導の中村史朗先生にお願いして体操を考案してもらい、またオフを利用してマット運動を徹底的にとりいれました。精神面では、ウサギ飛びも可成りやっただので（グランド一周）選手はつらかったと思います。

途中退部する選手も少なく五年目に全県優勝し暗れのインターハイ出場、三回

な苦難の道をたどらざるを得ない訳であるが、学校当局現役選手諸君の努力によって再び能代高校バレー部の華々しい活躍、名門・能代高校の復活を切に祈るものである。

（佐藤実 記）

昭和四十三年からの三カ年間は、輝かしい能代高校バレー部の歴史に空白の一時を記し、すばらしい伝統を完全に断ち切ってしまった。指導者のいないまま目標を見失い低迷の状態が続いたが、佐藤実先生石井周平氏ら先輩のバレー部に対する深い愛情と諸先輩の励まし、さらに素人中心ではあったが、戸沢、牧野、北林、松島ら現役の努力によって新生バレー部の基礎ができた。

四十七年県体で準優勝、翌四十八年県体で優勝し、どうにか全県レベルまでは達した感があった。能代在住の先輩諸氏、ほっと一息ついた処であった。それ以後は、能代工業高校、大館工業高校、秋田工業高校ら工業勢の壁を今一つ打ち破れないまま現在に至ってしまう。

昭和四十九年秋、高埜の新校舎に移転を機に十数年ぶりに能代工業高校との伝統の定期戦が復活された。牛歩ではあるが、確実に進んでいる。

（田村正男 記）

戦で敗れましたが翌三十一年、鈴木・菅原・寺田・大山・檜森等の好選手をようし体操部と共に全国優勝！

十八年間母校に勤務し全県優勝十一回（含む県体）。三年間泥と汗にまみれがムシヤラな練習に青春を賭けた部員が、全員全国大会に出場出来たことは本当に幸福であり、これも母校に務めていたからこそと深く感謝しております。
東京オリンピックには体操の小野選手

《軟式野球部》

全国大会初出場 国体第三位

「勝敗に明暗はつきもの。準決勝進出にわく江北高（東京）ベンチに比べ、ガックリした表情の能代高ベンチ。しかし能代高ナインは最後までさわやかであった。グラウンドに一札し球場を去る後姿にはさすがに寂しさが感じられたが、ナインは野球選手から一高校生の姿に戻り、笑みさえ浮かべた。藤井寺球場を去った。」昭和四十九年の第十九回全国高校野球軟式優勝大会での、

と共に、全国優勝時のエース菅原真敬選手が出場し、ピンチサバーバー・名レシーパーとしてテレビを賑わしてくれたことも忘れられない思い出です。

後輩の皆さん卒業しても、何時、何処でも胸を張り高らかに校歌を歌える能代高校マンになって下さい。先輩の築いた伝統を土台にし一大飛躍を期待しております。

準決勝進出をかけた対江北高戦の幕切れの様子を地元紙はこう報じている。

思えば随分長い行程であった。軟式野球部員は華やかなフットライトを浴びる硬式野球部員にくらべると常に忘れられがちであり、創部以来二十有余年という長い歴史を有しながらも、部の存在すら知らない生徒もあつたほどである。

戦後の混乱期、プロ野球や甲子園大会の再開は多くの人々のすさんだ心を癒してくれた。無類の野球好きが、だといって硬式ではどうもという連中が寄り集まって同好会として発足したのが、本校軟式野球部の第一歩である。昭和二十三年頃といわれている。以来二十六年間、春の大会優勝一回、東北大会、奥羽大会に各々一回ずつ進出す

るも、全国への道は遠かった。しかし、部員は黙々と努力に努力を重ねた。専門のグラウンドとてなく、第四小学校、秋木製鋼グラウンド、養蚕自治会グラウンド等を借り歩く「ジブシー練習」。草刈りに始まり、球さがして終わる毎日の練習。一度なんか、某小学校のグラウンドを借りた時、スパイクなしの練習で軟式野球は「草野球」との罵声を浴び、退部する者も出る有様で、真剣になつて廃部を考えたこともあつたという。だが人一倍の野球好きが、部員の心の支えとなり、このピンチを乗り切つてきた。

昭和四十九年八月四日、快晴の盛岡県営球場に、天にも届けと、能高校歌が響きわつた。全国大会への出場をかけての対今別戦（青森）開始の直前である。部員二十三名が、今迄の先輩諸氏の労苦を校歌に托し、また逸る心を抑えようと懸命に唱う姿に、純真な能高健児の真髓がみられた。試合は三A対零で本校の快勝。ここに、二十六年目にして念願の出場をなし得たのである。将に「梅は寒苦を経て清香を発つ」である。

「ヨクガンバッタ、クイナキセイシユンニカンバイ」 野救はドラマである。茨城国体で対宇久戦（長崎）のことである。宇久増本本校金田両投手の投げ合いで、大会

円盤投、四〇〇米リレーに選手権を得、全種目にむらなく得点を重ねて、圧倒的大差で全県中等学校初優勝の偉業を成し遂げたのであった。その後は、十七年に石川清寛主将（十五期）の時に戦技訓練を主体とした全県大会で優勝した他は、優勝の機会には恵まれなかったようである。後日太田口先生は、この頃のことについて私に話してくれたことがある。即ち全県大会で優勝するには陸上競技では困難である。理由は、能代地区の生徒は小柄で、全国水準には及ばない。比較にならない。ということであった。此の様な考えであったので、先生の指導の重点は、体操競技の方に次第に傾いていったものと思っている。

戦後は、二十一年に能中陸友会が結成されて、後輩の指導と後援の活動が盛んに行なわれた。二十二年、二十三年と全県大会連続優勝した。此の時、桐越、村木、三熊、檜森、川村等の選手が活躍している。三熊は大学に進んで更に練習に精進し一〇〇米一〇秒七の好記録をマークしている。二十四年には、これまで指導されていた佐藤吉夫先生が、能代商業に転任された。その後は、今日に至るまで優勝の機会には恵まれなかったが、個人的には、四十三年に杉原正規が走高跳に一米九二の好記録で全県大会で

入賞している。戦後の陸上競技不振の原因は、クラブ活動に共通な問題としての受験校の悩みがある。又練習場が硬式野球場とちか合っているために、走り込みの不足も考えられる。私が今の部を相当してから五年になるが、部員数は二十名から十名程度であり、県下一流校の二十五名―五十名の部員数とは比較にならない。しかもこれらの部員も半数以上が、陸上競技の未経験者で占められている。従って、個人的には時折良い選手が出て、全体としての全県優勝は当分望めない状態にある。又二十四種目に及ぶその内容の基本技術を修得し、屋外で多種目にわたって生徒の指導を行うには、四十才を頂点として若い熱心な指導者でなければならぬ。新設校舎が完成して公認競技場も出来たが、以上の様な多くの難問をもった陸上競技部の運営は、大変なことだと思っていた。唯今は一年生が四名、二年生は三名だけで、これではグラウンドの草刈りも困難である。それでも三年生の板倉君は棒高跳で団体へ、三木君は一〇米日でインターハイへとそれぞれ出場してくれたし、一年生の諸君も標準記録は突破しているので、来年は少々ではあるが楽しみである。

（顧問 田口真一）

卓球部

創立五十周年記念誌にクラブ史を掲載するならば執筆を依頼されたが、私は今年初めて部長になったし、数年前の資料も殆んど残っていない状況である。申し訳ない事であるが、現在のクラブの現況を簡単に述べさせていただく。

卓球部はどちらかと云うと、他の部の陰に隠れた感のするクラブであったが、一昨年高校総体で団体三位を獲得し、ここ数年の偉業と思われる成績を修めたが、昨年今年と能代工業に敗れた。

クラブ活動の形態として、色々あろうが、人生を左右すると云う大学受験に駆り立てられている生徒諸君にとって、自主的に活動する体育クラブも必要でなからうか。卓球を愛し、励ましあい、技術と体力を高め、主体性のある人格形成を目指して欲しいのである。

現在のクラブ員は、三年生三名、二年生二名、一年生十名の計十五名である。その中の市内在住者は七名である。練習は放課が午後三時ですので開始は三時四十分頃か

ら始まり、ランニング、柔軟体操等をしてから、五時三十分頃で終る。今年度の高校総体の団体戦は一回戦船川水産高校に四一〇で勝ち、二回戦は能代工業に〇―四で敗れた。ダブルスは渡辺・児玉組が出場したが、大曲工に一回戦で敗れた。個人戦は四人出場、残念ながら二回戦で敗退した。この中に一年生の工藤隆志、宮腰公悦が出場し、来年に希望を残す善戦をした。この外に、一年生に小川浩司、平賀真がいるのでこれらの生徒が三年になった時、より良い成績を修めるものと期待している。

硬式野球部

昭和三十八年七月二十八日午後四時十分、焼けつくような八橋球場一塁側スタンドは、テールと紙吹雪が舞い、歓呼のどよめきが止まなかった。全県制覇、幾百人もの先輩が夢にまで見て憧れつづけた甲子園初出場決定の一瞬である。

美しい桜並木で囲まれた樽子山に野球部が創設されたのは昭和四年と言われている。

武藤健二郎校長は、選手制度を認めず、体育講習としてスポーツを奨励し、旧制四高二年生の平川民治氏（秋田中出身）が講師として招かれた。初の対外試合は能代工と行なわれ、大敗した。打倒能代工の夢が果たされたのは昭和七年、瀬川勘一氏（四期）の時で、この年初めて全県大会へ出場し、角館中に敗退した。野球部として固まったのは昭和十年代で、相沢東一氏（七期）のころから金谷忠治氏（十二期）のころにかけてである。OBからなる松陵会も誕生し佐々木正之氏（一期）が会長に就任した。十一年春、小坂での全県選抜大会で、秋田商や大館中を降して、全県制覇の偉業を成し遂げた。柳谷健六氏（八期）が投手だった。

十五年には、鈴木音安、杉原茂両氏（二期）のバッテリーで黄金時代を迎え、春の県北大では、宿敵大館中を大差で降した。戦前、大館中を破ったのは、後にも先にも、この二回しかない。夏の全県大会には準決勝へ進み、奥羽大会（青森・秋田・岩手）への出場権を初めて獲得したが、五所川原農に逆転敗けを喫した。大会直後、創設期からの監督平川民治氏が辞任し、女房役の故伊藤廉氏（四期）がこれに代わった。

戦時体制が深まるにつれて、野球部廃止の学校が続出し、わが野球部も、十七年十一月三日の対能代商戦をもって終止符を打った。投手は佐々木満氏（十五期）で、戦後初代キャプテンの池井安昌氏（十八期）が一年生だった。広いグラウンドは、食糧事情悪化を理由に、鉾が打ち込まれ、畑と化した。

終戦翌年の二十一年の早春、杉原氏の筆に成る檄（げき）が校内に貼られ、野球部が誕生した。グラウンドも整備され、四月末には、戦没した諸先輩の慰霊祭が挙行され再び熱球が飛んだ。春の県北大では軟球で行なわれた。もちろん、スパイクはなかった。加藤武投手（十八期）を擁したが、大館中に敗れ去った。部員より倍も多い先輩がグラウンドへ姿を現わしては、物心両面の援助をした。夏の大会は、準決勝でまたも大館中に敗れた。

二十三年、学制改革によって、中等野球大会は、高校野球大会へと名称が変わり、その年の全県大会には、一年生の本庄文三投手（三期）の健闘によって、決勝戦へ駒を進めた。秋田に敗れたものの、全県大会初出場以来の快挙であった。二十六年、松谷儀朗キャプテン（四期）の時、黄金時代が再来したかに見えたが、全県大会で秋田

に逆転され、涙を呑んだ。二十八年には、江坂繁雄投手（六期）を擁して準決勝へ進み、奥羽大会（青森、秋田、岩手）へ戦後初名乗りを挙げたが、遠野に敗退した。

戦後の監督は、平川・相沢・杉原・鈴木・松谷の各氏に引き継がれ、輝かしい歴史を形成してきたが、三十五年新春、太田久氏（七期・明大卒）を迎えて、野球部は新しい時代に入る。三十六・七年の二年は、簾内政雄投手（十六期）を中軸に土台づくりの段階にあったが、三十八年には、三年計画が実を結び、甲子園大会出場の悲願を達成した。県大会では、秋田市立、五城目鷹巣農、秋田商を連破し、決勝で大曲農を六対四で振り切った。全国大会でも、京滋代表の長浜北を十二対一の大差で破り、初陣を飾ったが、岡山東商に五対一で敗れ去った。キャプテンは菊谷良己三塁手であった。

翌三十九年には、春の全県選抜大会で優勝し、つづく東北大会で、青森商 日大山形、青森をなぎ倒して、初の東北制覇を遂げるなど、破竹の勢いで進んだ。六月の新潟国体では、東邦（中部代表）を三対二で破り、博多工（九州代表）に延長十一回、一対〇で惜敗したが、全試合を投げ続けた渡辺節朗投手（十七期）には、フライ製造

投手の異名がつけられた。夏の大会は、秋田商、秋田を連破し、西奥羽大会（秋田・山形）では、山形南を破って秋田工と覇を争ったが、三対二で長恨の涙を呑み、連続甲子園出場は夢は成らなかつた。

四十一年、山田久志、大沢勉両氏（十九期）のバッテリーで地区代表決定戦にまで進み、また、四十三年には、津谷正和、清水吏、金野俊明三氏によるクリーンアップで春の全県大会で優勝し、夏の大会では、地区決勝戦に駒を進めたが、秋田市立に属し、甲子園への夢は断たれた。その後、四十四年には、信太慎一投手（二十二期）の健闘によって、二年連続甲子園を旨さず秋田市立に逆転勝ちをするなど、輝かしい成果を挙げたものの、甲子園への道は、次第に遠くなりつつあった。

しかし、母校創立五十周年を迎えた五十年、鈴木誠投手を擁して、春の全県選抜大会優勝、東北大会準優勝、能代選抜大会初優勝、県内チームには無敗という赫々たる成績を挙げ、部史始まって以来最強と称されるチームを編成して、今や、甲子園出場を目前にしたが、地区決勝戦で秋田商に敗れ、またまた甲子園への道を断たれた。

高校野球は、若人の意気と情熱のすべてを投げ出しての闘いに、その真価がある。

真紅の大優勝旗が白河の関を越えて、奥羽路にやってくる日は遠くない。われわれはその日を夢に描きながら、樽子の山に訪れる四季の彩りを忘れ、「熱と力と団結がおれたらのすべてだ」を合言葉に、きょうもまた、ひたすらに前進し続けるのみである。

（第十九期生 牛丸幸也）

剣道部

終戦後禁止されていた剣道が、撓競技として認められたのは昭和二十七年、能代高校剣道部もその年復活しました。当時は道場も防具もなく、市内を物色して古い防具を集め、体操場で各々が練習している一部分を借りて稽古をするという状態でしたが、その後旧柔道場、当時は寄宿舎でしたが、これを剣柔道の道場として改造して貰い、本格的に稽古出来る様になりました。

剣道部復活当時は、部員は四・五名位であったが、道場が出来てからは急に部員も増え、血の出る様な厳しい稽古であったが脱落する部員もなく一日も休むことなく精

進しました。終戦後第一回の全県大会は昭和二十八年春秋田市で行われ、準決勝で破れ、昭和二十九年の全県大会にも又準決勝で秋田商業に敗退したが、昭和三十一年柳谷準選手個人準優勝、三十二年、瀬川政宏・細谷栄一・畠山左千夫選手等全県準優勝を遂げ、全国大会に出場、翌三十三年伊藤正男・木内直幹選手等全県三位、個人戦では木内選手が優勝二度目の全国大会に出場この秋県体で初の全県優勝を遂げ、東北大会及び国体東北予選に出場、二十四年牧野尚義・田村正宏選手を中心とした県体では昨年に続いて二度目の優勝、国体東北予選でも優勝、初の国体出場を遂げました。翌三十五年工藤忠男・雄鹿正昭両選手全県個人優勝と準優勝をかちとり、共に高知の全国大会に出場。工藤君は準々決勝で惜しくも敗れましたが、はじめて能代高剣道部の名が全国に認められました。

その後も全県大会では常に上位の成績を取めて、益々輝かしい能代剣道部の歴史をつくり上げ、有望な選手も多数出るようになりました。戦前の卒業生では、牧野長治・平沢康司・花下哲夫・堺桂樹の諸氏は今も尚元気で竹刀を振っており、戦後では、十二期生の牧野尚義君が警視庁の剣道助手として警察官の指導に専念、十六期大高尚士

君は大館南高校で剣道を担当。十九期生袴田大蔵君は日体大の剣道助手として学生の指導に当たっており、共に剣道を専業とし、修業している。又八期生の鎌田吉郎君は、名門朝日生命の選手として実業団全国大会で大いに活躍している。十期生の瀬川政宏君、細谷栄之助君・畠山左千夫君・十一期生の木内直幹君、十三期生の工藤忠男君等現役として各種大会に出場、大いに活躍している。高橋地内に校舎が新築され、移転と同時に道場とも別れることになりましたが、苦業を共にし、剣道部を育て、くれた思い出の多いこの道場を離れることは部員一同にとつて忍び難いところがあった。

新校舎には未だ道場がなく、又終戦当時の様に、体育館で他の部と一緒に窮屈な稽古が続いている。早く道場出来て充分稽古が出来、益々部を前進させ、もう一度輝かしい伝統に花を咲かせたい。これがいまの部員の念願である。

柔道部

◇戦前

質実剛健の校風樹立のため、武道には特別力を入れられ、高橋岩五郎四段が師範であった。一期生、畠沢・野村・岡田、二期大坂、三期には、山崎五郎(現参議院議員)を主将として、佐藤平八(男鹿市)、豊田一郎と歴代諸先輩が厳格な規律の下、連日猛練習を強行、しばしば気を失い、覚めては松林に名月が懸つて、ということが屢々であった。四期には、早坂、田中、中村、それに五期の鈴木次郎が主戦力となり、加賀、鎌田、島田、福山、競技部の檜森等が多数控え、住吉神社の奉納試合、全県大会等に活躍し、漸く土台が完成した。「起てり能中建児」の応援歌が、今だに耳につき、母校の名譽の為に奮闘した当時から懐しい。

(住)

昭和11年、名柔道師範谷須田定基氏を迎え、以来「鳥の鳴かぬ日と柔道部の練習のない日は無い」といわしめた程の猛練習であった。昭和17年、柔道場が新設され、多

くの名選手を育てる。特筆すべきは、昭和14年全日本中学校選手権大会で、初出場ながら、連戦連勝、決勝まで進出、島根商業に敗れたりとはいえ、能中健児の名を全国に轟かせたことである。当時の選手は、鎌田、平泉、加賀谷、東山、小笠原の諸氏であった。東山氏は後、日大に進み、大学柔道界のキリン児として名を馳せた。

(第14期生高松芳郎 秋木工業機械)

戦時色一色の昭和17年、当時球技は殆ど廃止され、柔剣道の部員が一番多かった。県北大会は、能中・大中などわずか四校のみで行なわれ、一校三十名による対抗試合であった。能中は強く、前半戦で勝利をおさめ、常に楽勝であった。全県大会では、秋商と覇を競い、惜敗した。中学三年(昭和19年)学徒動員で練習もままならず、終戦後は、米軍の命令で、柔道は廃止の憂き目に会い、部員一同、現公民館の仮校舎の道場の畳に涙を流した。当時柔剣道復活は夢であったが、昔にまさる現在の隆盛は誠に喜ばしい。(第18期生井上茂 能代商業高校)

◇戦 後

戦後の学校柔道の復活は昭和35年、高校柔道の全国組織体が結成されたのが、26年6月23日で、その為私達が入学した昭和26

年には、柔道部は誕生していなかった。一年も過ぎ、二年生の春休み頃より活動したと思います。当時道場は寮宿舎として使用されており、畳もなく、練習場所は主に警察署の道場で、時にはグラウンドの芝生の上などでも行ないました。

五月頃には待望の豊が入り、木造体育館の隅に敷いて練習し、終ってまた積み重ねて帰る毎日でした。翌年には多数の新入部員と、顧問に柴田重行先生を迎え、主将成田昌一を中心に、早朝、夜間練習などして県大会に出場したことが懐しく想い出されます。特筆すべき成績は、主将成田昌一が個人戦で全県選手権、国体予選を抜群の体落しで、連続優勝したことがあげられます。

(新制第5期生芳賀徹 東京城北高校)

昭和31年に入学、当時は毎日泣きたくするような猛練習の連続であった。長期休みになると、部員の数より卒業した先輩達の数が多く、年三、四回の合宿では、必ず病人が数人出た程であった。私の一年の時、県北大大会で優勝、全県大会では、保坂秋徳選手が個人で一位になった。彼は、卒業後、大学と社会人で活躍、後、渡英師範として現在に至っている。二年の時は、佐々木一衛主将を中心として県北大大会で優勝。また佐々木は個人でも一位になった。三年の時

は、全県大会で決勝戦で短大附高と対戦したが二対一で敗退、涙をのんだ。又東北大会にも出場したが、初戦で山形の寒河江高校と対戦、2対1で勝ったが準々決勝で福島商に敗れた。

(新制第10期生檜森吉紀 浅内中)

昭和37年、県北大大会で二連勝、大山選手を軸とし、県北大大会に二連勝、全県大会では、宿敵秋高を三対一で敗り、県北に初めて優勝旗を持ち帰った。続くインターハイでは、二回戦で敗退した。翌38年は大物新人今立以下九名と新入部員が増加、連勝を目指し稽古に励んだ。幸先よく県北大大会三連勝、県大会では、決勝まで進んだが、相手は昨年同様の秋田高校、打倒秋商と意気盛んであったが、一対三で無念の涙を飲んだ。39年、県北大大会四連勝、余勢をかって全県優勝を狙ったが、秋田商業に決勝で惜敗。40年、県北大大会五連勝、全県大会で秋田商業に二対三と敗れ、宿願達成ならず。

(新制第17期生佐々木泰樹 県機動隊)

44・45・46年と三年間はややふるわず、県北大大会で三位がやつとであったが、個人戦では、秋元・原田・池田の各戦手が全県に名を轟かせた。しかし、46年度久々に全県総体で三位に入賞した。

(新制第20期制山須田武光 羽後銀行)

能代高校柔道部部长として

昭和46年4月に能代高校に赴任し、柔道部部长として現在に至っている。この間、部の活動結果として、46年、全県総体三位入賞、47年個人戦重量級準々決勝進出、48年県北総体優勝、全県総体個人戦中量級で三位入賞、49年県北大優勝、全県総体三位入賞、50年県北大優勝、全県選抜大会準優勝、全県総体三位入賞、同個人戦軽量級三位入賞、東北大会秋田県予選個人戦中量級優勝、東北大会へ個人戦団体戦ともに出場した。このようにここ数年不振であった能高柔道部も、徐々に戦績をあげてきました。色々な問題をかかえて居りますが、全県優勝へはあと一歩です。

又46年には、柴田功氏等の奔走により、「能高柔道部OB会」が発足、49年には部員父母による「能高柔道部父母の会」が結成され、支援体制も強化されてきました。

昭和37年に全県優勝、全日本柔道選手権大会にも出場者の出ている伝統ある能高柔道部その部長として今後も微力を尽したい。皆様のご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

(渡部耕四郎記)

アシダとマントとハダシ

佐藤 昭夫



学制の改革で入学は能中一卒業は能南だった。紅顔可憐の美少年も今や白髪を気にする年代となり、大学・勤務先と在京期間が長かったこともあって、母校を訪ねる時間もなく不肖のOBで申しわけない次第です。

当時すぐ連想するのは、アシダとマントでこれが私達のユニフォームでした。ごくまれにいるオーバリーと靴の人は都会からの転校生で、えらく上品に垢抜けしただけ見えたものでした。大変に武骨で蜜からな外見ですが、それでもマントを結ぶヒモを白くしたり、長くしたり、アシダの緒を太くしたり、変化を持たず者も居て、それが一種の粋であり、おしゃれだ

った様に思います。ところが、街を闊歩するにはそれで良いのですが、軟式庭球部で汽車通学(北能代)だった私に取っては、試合前の練習は激しく日没迄やり、終列車には間に合わず五キロの道をアシダで歩いて帰るのには参りました(当時バスはなく自転車も今の自動車以上に貴重品)。しかしその事が人一倍足腰の鍛練につながったと思います。何よりも当時の生徒とアシダは兵隊と鉄砲の様に切っても切れぬものだったので。

「テニス」と「ハダシ」

中学入学当初は剣道部・柔道部だけでしたが、後武道は総て禁止となり、軟式庭球部復活と同時に入学しました。当時の写真を見ると大塚主将(現能代市在住)を始め、皆ハダシです。とにかく運動グッズはぜいたく品でした。従って、真夏は頭の方は帽子で暑さをカバーしても、足の裏からの地熱で地獄の釜ユデみたいだったことを今でも身にしみて覚えています。